映画『折り梅』における認知症高齢者の理解の試み

A trial of the understanding of the demented elders referring to movie“ORIUME”

横　山　正　博
Masahiro　YOKOYAMA

１．研究の背景と目的

認知症高齢者数は今後もさらに増え続け、2020年には約290万人となることが推計されている[1)]。このように高齢化とともに認知症高齢者の数が増え続けていくわが国の状況においては、その介護問題はより一層身近なものとなっていくことは必至である。この介護問題に対しては、介護等に携わる専門的職種だけでなく、一般市民のレベルにおいても、認知症高齢者についての正しい理解と適切な対応方法についての普及が急務である。実際に、すでに一般図書、専門図書の類は言うに及ばず、地域での認知症の予防教室の開催や家族会の活動などさまざまな対応がみることができる。しかしながらこれらに対する関心は、実際の当事者である場合やすでに問題が生じてしまい今も尚問題が進行している場合に高いと推測される。つまり、問題が生じた後に、早くその症状や対応方法を知っておけばよかったというケースが多いのではないだろうか。

このような課題を解決する普及策としても種々のものが考えられるが、最も有効なもののひとつがマスメディアであろう。その中でも教養あるいは専門的マスメディアの場合は視聴者が専門家や当事者に限られる可能性がある。この課題をある程度解決することができるものは娯楽的要素も兼ね備えた映画ではなかろうか。昨今では、映画のみならずビデオやDVDも普及しているため、特段映画館にいかなくても、家庭での視聴も可能となっている。このような観点から、映画等で認知症高齢者を扱った作品を一般市民が鑑賞することは、その理解普及のために非常に有用であると考えられる。

そこで、今回は、認知症高齢者を素材とした映画のシーンなりが描かれている状況から、これまで得られている知見をもとに、一般市民のレベルにおいて認知症高齢者を正しく理解し、その対応方法についても併せて学習できるように、映画自体のストリーを記述し、そのストーリーを認知症高齢者のケア論という観点から解釈することを試みた。ただし、このことは映画の評論を行なうことを意味するものではない。あくまでも、映画の中に登場する人物や背景を通して、認知症高齢者とはどのような人のことを言うのか、あるいは認知症高齢者を取り巻く周辺環境やケアはどうあればよいのかについて解題を試みるものとする。

認知症高齢者を素材とした最初の映画は、有吉佐和子原作の『恍惚の人』をもとにした1973年の豊田四郎監督、松山善三脚本による『恍惚の人』である。次いで、1986年の羽田澄子監督・脚本による『痴呆性の世界』がある。

最近では、松山善三原作・脚本、栗山富夫監督による2000年の『ホーム・スイートホーム』、松井久子監督、松井久子・白鳥あかね脚本による2001年の『ユキエ』、続いて同監督、脚本による2002年『折り梅』、2003年の『ホーム・スイートホーム２　日傘の来た道』がある。

今回解釈を試みるのは、『折り梅』とした。本作品を素材として選定した理由は、第一に小菅もと子著『忘れても、しあわせ』[2)]を原作とする実話に基づいた作品であり、特別の美談であったり、

また映画作品として極端にデフォルメされたものではないといえること。第二に、本作品の評価については、「文部科学省特別選定」及び「厚生労働省推薦」等を受けており、またこの他上映会も全国各地で行なわれ、社会的にも評価されていること。第三に、本作品の内容として、主人公である認知症高齢者と同居している息子夫婦及び孫という家族構成が設定され、その主たる介護者はパートタイムの仕事をもつ嫁であり、ひとつの典型的な認知症高齢者を取り巻く家庭環境の中での一般的生活風景を描いていること。最後に、作品の扱った時代が現代であり、介護保険制度に関する内容も用いられていること等である。

2．解題の方法

(1) 解題の枠組み

本作品は、高齢者との同居から始まり、やがて認知症の症状が現れ、そのことによって介護者が混乱・拒絶・あきらめ等の葛藤を経験していくうちに、介護者が認知症高齢者を受容し、新たな人間関係を構築していくという構成をとっている。したがって、本作品で主人公として扱われている主たる介護者である嫁の心理的・行動的変化を中心に内容を区分する。いわば、認知症高齢者の在宅介護の一般的経過にしたがって内容を区分する。これについては、室伏が6期に分けて説明している[3)]。その6期については、室伏が作成した表[3)]を一部改変して表1に示した。なお、本作品で扱っているのは、第Ⅴ期までである。

各期ごとに、①重要なシーン・カットの状況、②状況の解釈及び③その状況に対する考えられうる具体的対応方法の3つの観点から記述していくものとする。

重要なシーン・カットの状況については、作品に表現されている内容についてなるべく解釈を加えないで客観的に写実的に記述するものとする。そのシーン・カットについて認知症高齢者及び家族に視点を当てて、認知症高齢者と家族の心理や感情の交流等について分析し、解釈する。そのような状況のときに、家族を含めた周囲は具体的にどのように対応したらよいのかを理論的に説明する。

なお、本論では第Ⅰ期から第Ⅲ期までの段階を扱う。特に第Ⅴ期は在宅介護の受容・定着期であり、認知症高齢者をどのように介護していけばよいかのメッセージが多く示唆されているが、紙面の都合上、第Ⅳ期及び第Ⅴ期は、別の機会に譲ることとする。

(2) 背景及び登場人物の説明

本作品の舞台は、名古屋市郊外のベッドタウン・愛知県豊明市である。本作品の主演は、認知症高齢者の主たる介護者である『菅野巴』であり、助演は認知症高齢者の『菅野政子』である。この二人をめぐる同居家族は、『巴』の夫『菅野裕三』、

表1　痴呆性高齢者に対する在宅介護の一般的経過（原著表記のまま）

時期区分	内　　容	時　　期
第Ⅰ期	高齢者の変化への思案・不安の時期	1　年　間
第Ⅱ期	自助・自省の時期（介護の始まり）	2　年　目
第Ⅲ期	在宅介護の困惑・混乱から苦悩や停滞の時期 (本格的介護)	3　年　目
第Ⅳ期	在宅介護の限界的時期 (以後いつでも起こる、燃え尽き症候群の危機)	平均4年目
第Ⅴ期	在宅介護の受容・定着の時期	以後の数年
第Ⅵ期	終末期ケアの時期	死亡前数ヶ月～年余

室伏の表を一部改変

その長女『菅野みずほ』及び長男『菅野俊介』である。これらの家族等の人間関係をジェノグラムに表わすと図１のようになる。同居家族を点線で囲んである。以後、本文で登場人物を表現するときは基本的に登場人物上の『名』を用いる。

『裕三』とパート勤めの主婦『巴』、中学生の『みずほ』と小学生『俊介』の四人家族に、『裕三』の母である『政子』が同居することになった。

ところが同居して間もなく、『政子』が変調をきたし始める。『政子』はアルツハイマー型認知症と診断され次々にその症状が出現し、その様子が描かれている。この『政子』の変調に、家族は戸惑い、苛立ち、団欒は崩壊ししていく。このような状況の中で、特に『政子』と『巴』の人間関係を中心にストーリーが展開されている。

３．結果と考察

(1)　第Ⅰ期：高齢者の変化への思案・不安の時期

１）転居

①　状況　集合住宅でひとり暮らしをしていた『政子』。ある日三男家族との同居生活が始まる。同居三ヵ月後当たりから『政子』の不自然な行動つまり認知症の症状の出現が表現されている。

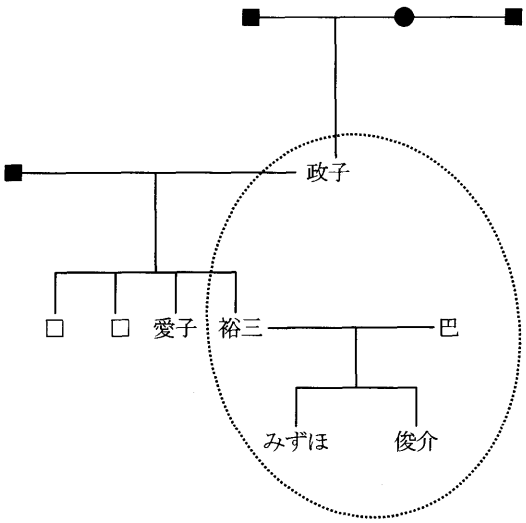

図１．菅野家をめぐるジェノグラム

転居そして同居生活の始まりは、『政子』にとっては新しい生活環境に適応していくという達成課題を内包していた。『政子』の慣れ住んできた集合住宅から三男宅への引越しの途上家族と過ごす車中、『政子』以外は楽しそうな雰囲気を味わっていた。しかし、それとは対照的に、『政子』の表情は新しい生活への期待というよりはむしろ不安が表現されていた。

②　解釈　転居自体はある意味で回避できない問題であろう。『政子』の年齢が作品中では定かではないが、特に女性の場合80歳を境に子どもとの同居率が高くなる傾向[6]がある。これは、もともと夫に先立たれた女性の独居高齢者が、身体的に、精神的に独居を継続することが困難となる年齢を表わしていると思われる。したがって、『政子』の転居、そして息子との同居は回避できなかった自然な状況と把握することができる。さらに転居をきっかけに認知症の症状が現われ[4]ることもすでに明らかとなっている。

そして、転居そして家族との同居は、いわば高齢者にとって社会環境の変化を意味する。この新しい環境に適応していくという課題を特に高齢者の場合抱えることになる[4]。具体的には、転居はこれまでの生活のすべてを捨て去ること、転居先での家族や近隣も含めた新たな人間関係の構築が必要であること、住居自体に対する適応も求められることを意味する。

しかしながら、高齢者の場合、新しい物事へ適応したり、新しい物事を覚えるといった流動性知能の低下[5]が見られるため、これらの課題を達成することが非常に困難となる。つまりこのことを別の表現をすれば、転居はその高齢者にとって孤独[4]をもたらすということになる。

『政子』は、同居という新しい環境に慣れ、生活できるのだろうかという不安、つまり新たな生活への適応に対する不安、慣れ親しんできた住居やそこで培われてきた思い出や人間関係との惜別が、漠然と襲ってきているように解釈できる。

③　具体的対応　ここでの具体的対応としては、『政子』をどう迎え入れるかという課題が存

在したはずである。『巴』と『裕三』が同居を決意する過程の中で、「同居すればこんなに遅い時間まで家事をすることはなくなる。」と『裕三』が述べているが、そこには単なる家事労働をやってもらえればよいという安易な考えがあったことは否めない。これについては、後に『みずほ』が母親である『巴』に「お母さんが楽になろうと思っておばあちゃんを呼んだんでしょ。」と揶揄し、これに対して『巴』は、娘に手を上げているが、そのような側面があったことを暗喩させている。

次に、『政子』の居室は確保されていたが、『政子』の精神的居場所、家族の中における居場所を『政子』と相談しながら確保し、『政子』が家族の一員としての自覚を持てるような環境作りにこの家族は失敗していると言えよう。つまり、家族は『政子』の不安の核心を汲み取ることができなかったのである。

できれば、息子夫婦の家に何日が外泊を繰り返し、これまでの生活を『政子』なりに整理し、新しい生活に対する不安を軽減し、一方自信を付けていけるようなアプローチ、つまり新しい生活への助走部分が確保されるべきであったと思われる。

2）不自然な行動／認知症症状の出現

① 状況　ある朝の出来事である。『裕三』の出勤前、『政子』は雑巾を何枚も作り『巴』に「『巴』さん、これ使って」と渡す。『巴』の反応は、「見てよ、これ、一体何枚縫ったら気が済むのかしら、シーツを勝手に切らないでって言っているのに」と『裕三』に愚痴をこぼす。後のストーリー展開で明らかになるが、『政子』は若い頃、東京で「お針子」の仕事をしており、裁縫作業は得意であった。この時、『巴』は『政子』の過去のことを何も知らない。

続くシーンは、『巴』がゴミ出しをしようとしたところ、『政子』がなかば無理やりゴミ袋を『巴』の手から奪い、「おいてきてやるよ」と玄関を出る。『巴』は、「お向かいの山際さんのお宅の角よ、わかります？」と念を押す。しかし『政子』がゴミを置いたところは、ゴミステーションではなくお向かいの山際夫人宅の玄関先であった。

ゴミをおいてきた『政子』は、流しで皿を洗い始めるが、少々ボーっとしている。その光景を見た『巴』は「私がしますから」と言って、『政子』から皿を取り上げる。すると、『政子』は「出かけるのかい？」と『巴』に尋ねるが、『巴』はめんどくさそうに、「今日は何曜日ですか、パートの日でしょ」と出勤時間を気にしながら強い口調で念を押す。

そこに、山際夫人が「これ、お宅のでしょう、」と玄関先に『政子』がゴミ袋をおいてきた苦情を訴えに来る。『巴』は「わざわざ、門の真ん中においてきたんですって、一体どういうつもりなの、これじゃ嫌がらせだと言われたって。」と『政子』を揶揄する。『巴』は揶揄する心を半ば抑えようとしながら、「何か欲しいものがあったら買ってきますから、誰もいないときはお願いだから、どこへも出かけないでね、ちゃんとお弁当もあるし、お茶だってポットのお湯でできるでしょ、ガスの火は絶対つけちゃだめよ。」と強い口調で念を押す。その言葉に対して、『政子』は目の前にあった昼食の弁当を床に投げつける。

続いて、『巴』の出勤途上、怒りと、なぜこれだけやっているのに、こんなことが起こるのかという混乱、あるいはこんなことがこれからも続くのかという『巴』の不安が表現されている。

② 解釈　朝の光景である。ここで表現されているものは、特別な日のことではない。ある程度同じようなことが繰り返された『政子』の認知症の症状の出現を象徴的に描いたシーンであろう。

独居生活から三男夫婦家族との同居生活を始めたばかりである。『政子』は、ある意味では世話になるという立場から、何とか一所懸命家族の役に立ちたいと言う役割意識があったと推測される。マズローのいう承認の欲求[7]と解釈できる。その思いが、若い頃習得した裁縫技術を生かした雑巾作りであった。おそらく昼間は、一人でいることが多く、暇を持てあましながら雑巾作りに励んでいたと思われる。さらに、作った雑巾を特に嫁である『巴』に気に入ってほしかったに違いな

い。作品中では表現されていないが、最初の頃は、『巴』も『政子』の作った雑巾に対して感謝や礼を述べていたであろう。しかしながら、その雑巾も使い切れなく、さらにシーツを破ってまでも作る『政子』の行動に嫌気がさしてきた。いつの間にか、『巴』から感謝や礼の言葉が失われていったと推測される。

ゴミだしも『政子』の家族の役に立ちたいという思いの表れととらえてよいであろう。しかし、ゴミステーションは、『政子』宅から死角にあるため、ゴミステーションの位置が認識できなかったと思われる。この時点で認知症の中核症状である記憶障害、判断障害[8]が確認できる。ゴミ出しの前に、『巴』が「お向かいの山際さんのお宅の角よ」と念押ししている。山際さんの家は認識していたのだろうか、山際夫人宅の玄関に放置する結果となった。おそらく、玄関先からゴミステーションが視野に入れば、ゴミ出しは容易に可能であったと思われる。一方で、後に『巴』が、朝出てくるのは一苦労であると、『政子』が『巴』を困らせると述べているように『政子』の『巴』自身に対するメッセージ性のある行動ともとれる。『巴』を困らせれば、『巴』は出かけずに家に居てくれ、ひとりにならなくてもすむというような思いがあったことは否定することはできない。

皿を洗う『政子』であるが、これも同様家族の役に立ちたいという思いの表あれでもあるし、流しの汚れ物はすぐにきれいにしなければならないという『政子』の習慣性によるものであったかも知れない。ただその場面での『政子』の皿洗いは、他に考えごとをしているようで、いわば「心ここにあらず」という雰囲気であり、『巴』はじれったい思いからか、無理やり皿を取り上げている。そして矢継ぎ早に、『政子』にあれこれ指図をしている。『巴』は、パートに行く時間をすでに過ぎていると考えられ、出勤にあせりを感じており、いらだっている様子もうかがえる。

これらのことから、『政子』は、ひとりになることを非常に恐れており、どんな理由にせよ『巴』に居て欲しいと念じていると予測される。ここには『政子』と『巴』のそれぞれに期待する内容が異なっていることを読み取ることができる。『巴』は、『政子』に対して、迷惑をかけないあるいは問題を起こさない『政子』でいて欲しいと思っている、一方『政子』は何とか『巴』にいつも家に居て欲しいと思っている。

つまり、『政子』はひとりになることへ不安、恐怖、寂しさ等の感情を抱いている。その気持ちをまったく『巴』は理解しようとしていない。自分の出勤のことを優先的に考えている。その姿は、ある意味では『政子』にとっては、非常に身勝手であり、一方的であり、威圧的であると感じたに違いない。そのストレスの蓄積が、弁当箱を投げ捨てると言う興奮を誘発したものと思われる。これは一般的家庭の中でもある程度は普通に見られる現象であり、認知症特有の症状と考える必要はないかもしれないが、しかしこのような出来事の連続が、高齢者にとっての孤独感をより一層増強することになり、認知症を進行させることにもつながったと思われる。

転居がもたらす意味は前節で述べたが、ある意味では『政子』は一所懸命新しい生活への適応を試みているが、その適応していこうとする行動を家族の誰も理解することはなかった。むしろ、家族が特に『巴』自身が、おとなしく何も問題を起こさなければよいという考えで『政子』に接した点に問題がある。そのことが『政子』にとって孤独な環境を生じさせ、次第に孤独感を感じるようになり、今度はその孤独感を一所懸命回避しようとする行動に移っていったと推察される。その行動は、周囲から見ると非常に理不尽と映るかもしれない。しかし、認知症高齢者本人、つまり『政子』そのものはそれが理不尽であると言うことがわかっていても、そのような方法をとってしか主張できなくなってきている様子をうかがい知ることができる。

さらに付け加えるならば、『政子』はマズローのいう生理的欲求と安全の欲求[7]を満たすだけの生活であったに違いない。それらよりもさらに高次の欲求、つまり愛情・所属の欲求、承認の欲

求、自己実現の欲求という欲求を充足させる環境にはなかったといえる。

これらの一連のシーンに共通することは、『政子』は結局孤独という環境に陥ってしまったことである。後に『政子』が家を飛び出す場面があるが、その中で「家族の中の孤独より、一人の孤独の方がよっぽどましだ。」と言うことばに象徴的に表わされているといえよう。

特に、孤独について、竹内は孤独という環境が認知症の症状をもたらすとしている[4)]。そのメカニズムについては、竹内が図２を示しながらその所論の中で述べている。竹内は、転居高齢者の地域での孤独はかつての友人や仲間との間にあった「役割の喪失」であり、その役割を通してつくられてきた、自分の存在・自己意識・アイデンティティの問題である。そして新しい環境を自分の新たな生活として結果的に自己意識・アイデンティティを組み変えていけば適応できたことになるが、これまでの役割を失うことによりアイデンティティを組み変えないと、精神構造の解体をきたし、認知症の症状が出現すると述べている。

『政子』はおそらく自分なりに一所懸命自らのアイデンティティを維持するため、あるいは組み変えるため、雑巾作りやゴミ出しを行なおうとした。しかし、役割を自ら作り、家族に共感しようとするその一所懸命な『政子』の姿を家族の誰も読み取ることができなかった。結局、無意識下で何もさせない高齢者にし、孤独な環境に追いやろうとしている家族の姿を読み取ることができる。同時にこれまでに体験したことのないさまざまな出来事に家族は思案しながら不安を抱えていくことになる。

③　具体的対応　ひとり暮らしの親のいわゆる「呼び寄せ」に関する場面である。『政子』は、自分のこれまでのアイデンティティを組み変えようと努力している様子がうかがえる。まずこの適応していこうとする行動、あるいは場合によってはそれはもがきに見えるかもしれないが、必死にアイデンティティを組み変えて新しい生活に適応していこうとしている姿を読み取ることが必要である。本作品では、その姿が、雑巾作りやゴミだしといった日常の些細な出来事として扱われているが、その意味するところは大きい。些細なことでも、『政子』に家族の一員となれるような役割を持たせるような働きかけが必要であり、たとえば『政子』にとっての雑巾作りの意味を十分に理解することが重要である。

『巴』は、無論そのようなことはできなかった。むしろ、呼び寄せたのだから、よい嫁を最初は演じようとしていたであろう。そのことがますます、『政子』の家庭の中での役割を奪ってしまう結果となったと推測される。

新しい環境の中に必死に適応していこうとする並々ならぬ努力が、時には家族にとって不都合で

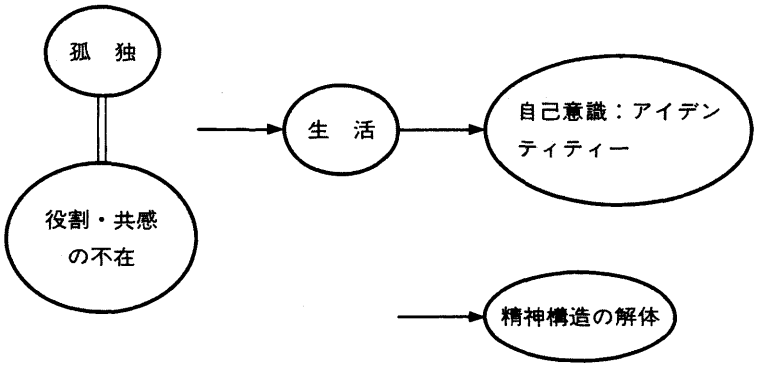

図２　孤独から痴呆への道筋（原著表記のまま）

出典　竹内孝仁：介護基礎学

あったり、滑稽であったりみえるかもしれない。家族はそのような精神的な心理的なメカニズムが働いていることを十分汲み取りながら接することの重要性をこの第Ⅰ期の場面は示唆している。

⑵　第Ⅱ期：自助・自省の時期

１）本格的痴呆症状の出現

①　状況　夕食のシーンである。『政子』はおかずが盛りつけてあった大皿を手に取り、口の中におかずをかきこむ。その様子を見ていた『裕三』は「もっと普通に食えないか、こっちが食欲なくなるよ、頼むからそんな食い方やめてくれ、やめろ。」と言いながら『政子』から皿を取り上げる。『政子』は、「帰る。」といって自分の部屋に行く。『裕三』は、「何度繰り返したら気が済むんだ。」とあきれてしまう。娘のみずほも「いつまでこんな生活が続くのか。」と怒りを表わす。

『政子』は身支度をして、お針箱を風呂敷に包んでかつて住んでいた高浜市に帰ろうとするが、駅でどうすればよいか迷っている。しばらくして、『巴』が駅に迎えに来る。『巴』の姿を確認した『政子』は一瞬笑みを浮かべ、『巴』の声かけによっておとなしく一緒に帰宅する。

家に帰った『巴』は娘の『みずほ』に『政子』の介護に協力してくれと頼む。「おばあちゃんは病気だと思うのよ、だから家族がもっと大切にしてあげないと。」と『みずほ』を諭す。しかし、『みずほ』は、『巴』がパートを止めたくないから呼び寄せたのではないかと母親を揶揄する。

②　『政子』にとっての孤独な環境はほとんど改善されていない。それに対する抵抗として、食事の態度等に象徴的に表現されている。同じようなことは、おそらく何度も繰り返されていると推測される。『巴』自身もどうすればよいのか思案に暮れ、具体的解決方法を見出せないでいる。しかしながら、その中でも、認知症という疾病に気付き、『みずほ』に「もっと大切にしてあげないと」のことばに代表されるように自省の念が生まれていることも確かである。しかし、それをどうやって家族に理解してもらい、また自分で実行に移すのかわからないでいる状態である。そのような迷いが、娘に対して手を上げてしまうという行動を誘発したと考えられる。

一方、『政子』はことがあるたびに、かつて住んでいたアパートに帰ろうとする行動を起こしていたのかもしれない。食事のことで『裕三』に叱責されたことは『政子』にとって非常に不快であり、これからそういう不快な現実と戦っていかなければならないことを意味している。しかし、その現実との戦いに疲れてしまった『政子』には必然的に現実から逃れる方法しか残されていないことになる。その現実からの逃避が「今から家に帰る。」という行動を誘発させているものと考えられる。しかし、記憶障害、認知障害、判断障害という中核症状は当初よりも進行していると考えられ、駅から先の行動をとることは実際にはできなかった。

このシーンで重要な『政子』の言葉は、前節でも指摘したが、「家族の中の孤独より、一人の孤独の方がよっぽどましだ。」である。まだ、この孤独に対する家族や周囲の対応が十分できていないと判断される。『巴』自身は、家族として介護していかなければという思いが芽生え始めているが、それをどのようにしたらよいかわからないという状況である。また、家族自身も受け止め方が異なっている。『裕三』は、『政子』の世話を『巴』に委ねきっている。自分自身が『政子』を受け止めようとする思いはいまだに芽生えていない。『巴』に何とかしろといっているような気配さえ感じさせる。仕事は自分がやっているのだから、家のことは妻である『巴』の役割だと言わんばかりの様子がうかがえる。娘の『みずほ』は、祖母の症状に対して、一見受け止めているようであるが、やはり母親の役割だと思っている。母親の協力要請に対して拒絶反応を示している。ただ、祖母が家を出て行こうとしたときに、声をかけており、単純に祖母のことを心配している面もうかがえる。このように『政子』の行動に対して、家族が『巴』に責任を負わせるような形で、『政子』の問題からは回避しようとする家族関係を読み取ることが

できる。ここに介護者の孤独、そして今後の介護負担が憎悪していくであろう予兆を読み取ることができる。

③　具体的対応　いわば『政子』の言動に家族全員が振り回されている状況にある。しかし、『巴』の中には、なんとかしなければいうと苦悩と自省が芽生えてきている。『巴』は『みずほ』に一応は協力してくれとアプローチしているものの、うまく夫や娘を諭せないでおり、家族全体の問題として『政子』の介護をしていこうとする協力体制を作るまでには至っていない。つまり、『巴』自身が『政子』の介護を背負っていかなければならないという状況に陥っている。

結論から言えば、『政子』の介護のキーパーソンは『巴』であることには間違いなく、『巴』を中心に家族全体が、『政子』を受け入れようとする姿勢を持つことが必要であった。『巴』は、『政子』が何らかの病気であることは『みずほ』に対する言葉から認識できていたと推測される。高齢者と同居する家族は、認知症に関する知識、特に症状や発症のメカニズムを普段から習得しておくことの必要性[9]を示唆している。

2）受診

①　状況　『巴』はパート先の同僚から受診を勧められ、病院の神経内科を受診する。その結果初期のアルツハイマー型認知症との診断を受ける。その結果を『巴』は『裕三』に報告する。兄弟も当てにならないし、この先のことを案じて、『裕三』は悲嘆にくれ、泣き崩れる。『裕三』は『巴』に「みてくれるのか」と言う。

②　『裕三』も『政子』がアルツハイマー型認知症だとようやく認識をし、夫婦間で、認知症という疾病を抱えた『政子』を今後面倒みていかなくてはならない、つまり介護をしていかなければならないという環境となる。しかし、ここで初めて夫婦間においては認知症である『政子』を介護していくという共通認識が芽生えたといってよいであろう。

③　このように、認知症が疑われる場合は、専門医療機関を受診することが重要である。また、どのような診断が下ってもそれを受け止めていくプロセスが重要である。『裕三』の場合は、まだ受容は十分にできていないが、『巴』に多くの部分を委ねざるを得ないことを認識し、『巴』に「みてくれるのか。」と『政子』の介護を依頼をしている。自分の母親の介護を嫁にしてもらわなければならないという遠慮も読み取ることができる。

しかしながら、何とかこの時点で、『巴』及び『裕三』とで認知症高齢者を介護していこうとする姿勢を持つ意識がようやく芽生え始めたといえよう。このように家族で問題を共有していくことは非常に重要である。介護者ひとりの手に委ねられたりする場合、介護者自身が孤独となり、介護の負担をひとりで背負っていくことになり、精神的身体的症状を呈していくこともまれなことではない。場合によっては燃え尽き症候群[10]を呈することもある。

(3)　第Ⅲ期：在宅介護の困惑・混乱から苦悩や停滞の時期

1）盗られ妄想の出現

①　状況　孫の『俊介』が小学校から帰宅するや否や、『政子』は自分の財布の中の現金が盗られたと『俊介』に訴える。しかし、『俊介』は取り合わない。しつこく『政子』が『俊介』に訴えかけてきたところに『巴』が帰宅する。『政子』は興奮しながら、『巴』に向かって「金を取っただろう。」となじる。『巴』も興奮しながら、「そんなことはしていない。」と言い返す。

『巴』は、「一緒に探してみましょう」と強い口調で、『政子』の部屋に向かう。『巴』は、『政子』の部屋の中をくまなく探す。机の引き出しから、古くなった饅頭が出てくる。そのことについても揶揄する。『政子』のベッドのシーツをひっくり返すと封筒が見つかり、その中に現金が入っていた。「これじゃないの。」と『政子』に示す。「自分で隠したんでしょう、毎回人のことを泥棒扱いにして、この家にお母さんのお金をとるような人はいないんだから、ちゃんとここにしまっておき

なさい。」と『政子』に強い口調で言い寄る。

②　解釈　ここで表現されているのは、盗られ妄想である。認知症の典型的な周辺症状である[11]。

最初はおそらく単純に、現金を誰にも目にも触れられないように、シーツの下に隠していたに過ぎない行動であったかも知れない。認知症の症状もある程度進行してきているので、当然記憶障害もみられる。つまり自分がどこに現金をしまいこんだか忘れている状態である。普通ならば、自分でその場所を思い起こし適当に探せば出てくる状況である。しかし、認知症高齢者は、自分に非があることは認めたがらない傾向がある。そして、その責めの対象が自分以外の人間、特に認知症高齢者の部屋に最も出入りする介護者に向かうこと[12]は自然の成り行きである。

③　具体的対応　このような場合、仮に自分が疑われたとしても、決して自分ではないと興奮しながら言い返したりすることは、逆に高齢者の疑念を助長することになりかねない。『巴』の行動は、まさに不適切な行動・態度であった。むろん、ありえない疑いをかけられれば、興奮し、否定することは普通のことであり、一般的状況では理解できるが、相手は認知症の症状を呈しているいわば病者である。

このような状況における基本的対応は、まず気持ちを落ち着かせることである。そして、何よりも困っているのは現金を盗られたと思い込んでいる本人であるという理解とその大変さに寄り添うような対応が望ましい。つまり、困っている人を受容するという態度が望まれる[13]。

高齢者を興奮させないためには、お茶やお菓子を勧めるなどその現金に対するこだわりから注意をそらすことである。あるいは、一緒に探すことを提案し、実際にそうすることである。『巴』はこのことを実行しているが、『巴』自身興奮し、自分ではないと強く主張しているところに対応の問題がある。

ただ、このようなことは、『巴』の「毎回人のことを泥棒扱いにして」という言葉から、何度も繰り返されているようである。このように繰り返される場合は、現金をしまっておく場所をよく相談して決めておく、あるいは隠しておく場所の見当をつけておくなどの対応が望ましい。少なくとも、このシーンに描かれているように、叱責をしたり、無視をするという態度は不適切である。

２）夫婦の苦悩

①　状況　夫の帰宅後、夫婦で話をしている。『巴』は、「パートを止めろ。」と言う『裕三』に「止めない。」と言う。『裕三』は『巴』の体のことを気遣って言っていると主張するが、『巴』は、「自分が介護に専念するのが当たり前だと思っている。」と言い返す。『裕三』は開き直った様子で、「たかがパートだろ。」と言う。『巴』はこの言葉に怒りを覚え、「たかが？　主婦を馬鹿にするんじゃないのよ、私の人生はあなたやお母さんや子どものためにだけあるのじゃないのよ。」と言い返す。さらに「兄弟はどうなっているの？　私がどう頑張ったって所詮他人としか思っていない。」と強い口調で訴える。『裕三』は何も言い返せないでいた。

②　解釈　夫が仕事を持ち、妻が主婦をしている場合には、結局最終的には、妻が高齢者の世話をせざるを得ない状況を如実に示している。またパートタイムの仕事に対する夫婦間の価値観の違いも表現されている。『裕三』は、パートタイムは、暇をもてあました主婦の溜まり場程度にしか理解していない。これらのことに関する妻の苦悩が表現されている。『巴』の言葉に、言葉を失った『裕三』にも苦悩が表現されている。

③　具体的対応　真剣に物事を突き詰めれば、夫婦間であっても価値観の違いは現れてくる。こういった中に苦悩を読み取ることができるのだが、しかし今誰が最も苦悩しているのかという発想の転換が必要であった。この『政子』の苦悩に夫婦で目を向けることが必要であった。前節で、『巴』と『裕三』とで認知症高齢者を介護していこうとする姿勢を持つ意識がようやく芽生え始めたと解釈したが、その後特に『裕三』の介護に対する思

いは深まっていなかったようである。認知症高齢者自身の苦悩に目を向けるまでには、介護者自身が葛藤や苦悩の経験を必要とするということも示唆している。

3)『政子』の苦悩

① 状況 『政子』が家の中の鉢植えに水をやっている。ふとした弾みから、その鉢植えを落とし、割ってしまう。一瞬どうしようかと思った『政子』は、他の鉢植えまでもウッドデッキに投げつけてしまう。

そこへ『政子』の長女『愛子』が突然訪問してくる。『愛子』に『政子』は、「近頃私ばかになっちゃって。」としょげた声で言う。さらに、お湯を沸かそうとする『政子』は、元栓が締められていることを知らず、コンロに着火しようとするができない。『愛子』は、このような実母を受け入れることができない。そして、病気の『政子』をひとり置いて、さらにガスの栓まで締めてパートに出かけた『巴』に対して憤りを感じ、衝動的に大阪の『愛子』の家に連れてかえる。しかし、『愛子』の家でも異常行動がみられた様子であり、『愛子』の手に負えなくなり、『巴』が『政子』を大阪まで引き取りに行く。

② 解釈 水遣りは『政子』なりに見つけた家の中での役割であり、楽しみのひとつでもあったものと推測される。「お水だよ。」と植木に優しい声かけをしながら水をやっていた。しかし、植木を落としてしまい、どうしようかと一瞬思案するが、その対処をどうしていいかわからなかったのであろう。そのどうしていいかわからないという苛立ちが、他の植木までも投げつけ割ってしまうという行動を誘発させてしまったと思われる。どう行動すればよいかわからず、パニック状態を起こしてしまったのである。そして、『愛子』に「近頃私ばかになっちゃって」としょげた声で言う。ここに『政子』の苦悩が読み取れる。

最も苦悩しているのは、『政子』自身であった。ある意味では、認知症高齢者は、自由奔放で好きなように人生を生きている、わがままを言い放題生きていると、老後は認知症になった方が楽に生きていけるといった誤った風評が存在するようにも思える。しかし、消失していく記憶に対して不安を抱き、嫁から叱責され、情けない思いをしながら、今後自分はどうなっていくのだろうかと言う漠然とした原不安を抱えていたと思われる、それを最も言いやすい『巴』に訴えながら生きている姿が認知症高齢者としての『政子』なのである。

『愛子』の行動はあまりにも無計画で衝動的である。しかし、実の娘としての母親に対する思い、プライド、そういったものが大阪へ連れ帰るといった行動を誘発させたと思われる。当然のことながら、『政子』が『裕三』宅へ転居してきた時と同じようなことが繰りかえされたに違いない。

この時点で『愛子』は「やっぱり『巴』さんにまかせるしかないわ」と言っている。すでにある意味では、『巴』と『政子』の絆は堅いものとなっていたのである。『政子』にとって『巴』は最も頼りになる存在となっていったのである。

③ 具体的対応 常に最も苦悩し不安を抱きながら生きているのは認知症高齢者自身であるということの認識を持つことが重要である。そのためには、認知症高齢者がいかに不安と葛藤しているかという事実あるいはそのメカニズムを認識することが重要である。『政子』の何気ない水遣りと言う行動から、なぜパニックを起こしてしまったのか、一つ一つその機序を振り返れば専門的知識がなくても容易に理解できることである。理性的に適切に処理をすることができない場合は、感情の失禁状態を生むことがある。したがって、作品中にはパニックになった『政子』を叱責する場面はないが、このような状況に対して、非難したり、行動を修正することは最も不適切な対応方法である。

さらに高齢者を叱責することがなぜ不適切であるかについては、叱責を受けることはどんな理由であれ、それは不快な感情である。一般的には、叱責を受ければ、なぜそのような叱責を受けたのかという原因を理解し、不快ながらも納得することが多い。しかし、認知症高齢者の場合は、例え

ば叱責を受ける原因はすでに過去のことであるので、すでに記憶されていないことになる。したがって、認知症高齢者の場合は、なぜ自分が叱責されているかという原因を理解できないことが多い。しかしながら、その時の不快な感情が残像現象として心理的に残存する。そして叱責をする人は、自分にとって不快な人であると思わせてしまうと言うメカニズムが働いているのである。

４．まとめ

本論では、認知症が何であるかを一般市民のレベルにおいても、その理解と適切な対応方法についての普及策として、認知症高齢者を扱った映画を素材に、在宅介護の経過、つまり家族が認知症老人をそのように受け入れていくかという枠組みで解題を試みた。特に本論で扱った内容は、第Ⅰ期から第Ⅲ期までであるが、認知症高齢者と同居する家族はどのように理解し、対応をしていけばよいか、本論から明らかになった点を以下にまとめる。

①　認知症発症の原因は、転居という環境の変化によって生じるケースが多く、特に「呼び寄せ」という形での転居に際しては、これまでの生活をその人なりに整理し、新しい生活に対する不安を軽減し、一方自信を付けていけるようなアプローチ、つまり新しい生活への助走部分が確保されることが必要である。

②　転居に際しては、新しい生活の中で、家族の中で一定の役割を持たせ、その人自身が自分の居場所を見つけることができるよう支援することが必要である。つまり、愛情、所属の欲求、承認の欲求、自己実現の欲求という欲求を充足できるよう支援すすることが重要である。

③　以上のことを包括的にいえば、孤独にさせないということである。

④　認知症の症状が出現した場合、その介護等について主たる介護者だけでなく家族全体で共有することが重要である。そのためにも、普段から高齢者と同居する家族は、認知症についての学習などをしておくことが望ましい。

⑤　認知症の症状が出現した場合、早期に専門医に受診したり、相談機関に相談することが望ましい。

⑥　妄想などの認知症に特徴的な症状が出現した場合、その発生のメカニズムや具体的対応方法について理解することが重要である。

⑦　最も苦しく辛い状況にあるのは、介護する家族よりも認知症高齢者その人自身であることを認識すべきである。

⑧　認知症高齢者にとって頼りとなる人の存在は重要である。

なお、本稿校正時に、厚生労働省より行政用語として従来の『痴呆』にかわって『認知症』を用いることとし、さらに一般的な用語についても『認知症』を使用するように報告されたことを受けて、本稿においても引用を除いて『認知症』という用語を用いた。

参考文献

1）精神保健福祉研究会監修：我が国の精神保健福祉（精神保健福祉ハンドブック）平成13年版．118，太陽美術，東京（2001）

2）小菅もと子：忘れてもしあわせ．日本評論社，東京（1998）

3）室伏君士：痴呆老人への対応と介護．263-267，金剛出版，東京（1998）

4）竹内孝仁：介護基礎学．106-121，医歯薬出版，東京

5）仲村正巳編：新高齢者の心理．31-33，みらい，岐阜（2002）

6）厚生労働省：国民生活基礎調査．（2001）

7）福祉士養成講座編集委員会編：新版老人・障害者の心理，第２版，140，中央法規出版，東京（2003）

8）新版老人性痴呆疾患診断・治療マニュアル．48-63，新企画出版社，東京（1997）

9）杉山孝博編：痴呆性老人の地域ケア．16-21，医学書院，東京（1995）

10）痴呆性老人症例研究会編：痴呆性老人の在宅ケア．84，中央法規出版，東京（2000）

11) 森敏：痴呆性老人のとらえ方・対応の仕方．6-18，金芳堂，京都（2001）
12) 高齢者痴呆介護研究・研修センターテキスト編集委員会編：高齢者痴呆介護実践講座Ⅰ研修用テキスト－基礎課程－．第一法規出版，292-293，東京（2001）
13) 伊苅弘之：痴呆介護こんな時どうする？．21-25，日総研出版，名古屋（2002）

Abstract

The purpose of this article is trying interpretation about the care for dementia basing knowledge until now referring to movie that made them a theme that citizen can understand them and learn how to cope with them. Method of interpretation is describing important scenes and cuts, interpreting about them and discussing about care for them. It is selected Japanese movie“ORIUME as it is based on the true story, evaluated socially, discussing the typical modern care problem of demented elders.

Key words

demented elders, care for demented elders, movie “ORIUME”